

## 〈額縁小説〉の転換

### —アルフォンス・ドデーから佐藤春夫へ—

田所 光男

佐藤春夫「瀬沼氏の山羊」は、比較文学で言う影響関係の検討を試みようとすると、成果が上がりにくい小説のように見える。エピグラフとして、「年経た樅はその歳になるまでこんなに美しい山羊はつひぞ見たことがなかった。—アルフォンス・ドオデエ」(24)と掲げられており、これと小説標題とを合わせて考えると、ドデーの「スガン氏の雌山羊」との連関が容易に想定できてしまうからである。しかも頁をめくっただけで、第二章の終わり近くでは、ずばり「*La chèvre de M.Seguin*」というフランス語が目飛び込み、続く第三章には「スガン氏の山羊」という章題のもとドデーの小説のかなりの部分が何頁にもわたって翻訳されているのである<sup>1)</sup>。これは影響関係に関心をもつ者にはやる気をそがれる事態であろう。作家が言及しない、あるいは意図的に隠した、あるいは意識していない下敷きを明らかにしてこそその影響関係研究だと思われるからである。しかもこの佐藤の小説の場合、別の次元での疑問も生じてしまう。ドデーの短編を翻訳してそのままこれほど大量に投入し、自分の名を冠した小説として公表していいものだろうか。これはもう影響とかテキスト連関などという次元の問題ではないのではないか。

「スガン氏の雌山羊」はアルフォンス・ドデー『私の風車からの手紙』(1869年)に収録されている短編である。この著作は現在まで多数の日本語訳が出版されてきているが、佐藤が「瀬沼氏の山羊」を発表した1924(大正13)年当時、日本語では読むことはできなかつた可能性が高い<sup>2)</sup>。明治以来、作家たちには人気のあつたドデーも<sup>3)</sup>、プロヴァンス関係で言えば上田敏の『海潮音』の中でいくつか読むこともできたフェリブリージュの詩よりも、手の届かないものであつたのかもしれない。ドデーのこの魅力的な小品を日本に紹介したい。これが佐藤にこうした手法をとらせた一つの動機であつたとも考えられる<sup>4)</sup>。

しかしそれにしても、他の作家の小説の大部分を翻訳してそのまま取り込む

には、それなりの気負いもあったことであろう。また利用した素材を明かしつつ小説を書くには、自分の技巧に相当の自信もあったのではないか。

人生の見方に一くせ（個性）あり、着想に一工夫を要し、表現にもまた一考を要し（実は真の作者にはそれがみな楽しみなのだが）（「短篇小説は何故不振か」178）

と、短編小説を書く勘どころを説明している佐藤である。この三要素は「瀬沼氏の山羊」でもきつと追求されて、佐藤はこの種の「楽しみ」を味わっていたことであろう<sup>5)</sup>。

本稿はこういう推測のもと、佐藤によるドデーの利用を解明するものである。内部にドデーの小説を組み込んだ佐藤の小説は一般に〈額縁物語〉(récit-cadre)と呼ばれる形式に分類できるであろう。そしてこの小説構造はもともとドデーの原作ももっていたものであり、佐藤によるドデー利用の考察を進めると、〈額縁小説〉の手法の検討に導かれるのである。本稿は、二つの小説それぞれが〈額縁〉という静態的な空間分割を喚起する用語ではなく、むしろ対位法のような動的で同時進行性を示す言葉によっていっそう適切に捉えられる構成をとっていることを明らかにしたい。

### ドデー「スガン氏の雌山羊」における〈額縁〉の微妙な不整合

ドデーのこの小説はフランスでは非常によく知られている。雌山羊のブランケットが山の麓のスガン氏の囲いを抜け出て、山の自由や美しさを一日中満喫した後、最後、狼に食べられてしまう物語は、小学校の授業でもよく使われている<sup>6)</sup>。狼と山羊は日本の昔話ではあまり見かけない動物たちであるが、「狼と七匹の子山羊」、「赤ずきんちゃん」と西欧出自の物語に目を移すと、狼はいつでも悪役としてそこにいる。『聖書』にもしばしば姿を現す。「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ」（「マタイによる福音書」10 - 16）とイエスは十二使徒に告げている。従順な羊と比べ山羊はやや扱い動物のようで、ラ・フォンテーヌ『寓話』も、その飛び跳ね、動きまわる性質を描き出しているが（「二匹の牝ヤギ」巻の十二 - 4）、残虐、非道な狼に対し、羊も山羊もか弱い存在である点は変わりがない。狼を対極に置いたこの関係構図は西欧の文化伝統の中に深く入り込んでいる。

しかし子供用の読み物としてリライトされたバージョンとは違って、ドデーの原作は狼と雌山羊の物語だけで成り立っているのではない。もう一つ別のストーリーが組み合わされている。「パリの抒情詩人ピエール・グランゴワール氏に」という副題が示しているように、この小説はパリ在住の友人に宛てた手紙の中で雌山羊と狼の物語が語られる〈額縁小説〉になっている。

『私の風車からの手紙』には、この他にも「アルルの女」など〈額縁小説〉がいくつか収められている。その中で「スガン氏の雌山羊」の額縁の特徴は短編集全体を貫くパリとプロヴァンスを分かち境界線が太く彫り込まれていることである。桜田佐も1932（昭和7）年刊行の『風車小屋だより』「譯者の序」の中で明記しているように、ドデーは「一八四〇年、南佛の古都ニーム（Nîmes）で生まれ、一八九七年、巴里で没した」（ドデー 3）。ドデーは故郷の南仏を離れパリに出た人間である。執筆言語もフレデリック・ミストラルのようにプロヴァンス語ではない。『私の風車からの手紙』「前書き」には「アルフォンス・ドデー殿、詩人、パリ在住」が登場し、これが本書全体の「私」である。この「私」は第一話「ボケールの駅馬車」では「パリジャン」と呼びかけられている（«La Diligence de Beaucaire» 253）。ボケールはドデーの生地ニームの隣町である。ローヌ河にかかる長い橋を渡ればタラスコンで、そこはもうプロヴァンスである。著者ドデーは幼い頃、ボケールに商売に行く父が買って帰るボケール人形を心待ちにしていたという（Gérard 76）。要するに、彼は地元の間人なのだ（こういうまとめ方こそがパリ視線なのかもしれないが）。矢橋透はフェリブリージュの運動と、ドデーという「ディアスポラ」との違いを、後者のもっていた、プロヴァンス「地方の魅力をいわば外側から眺めあこがれる、慰安そしてノスタルジーやエキゾティシズムを求める視線」に見ている（13）。ドデーを「ディアスポラ」と呼ぶことについては必ずしも賛成できないが、ドデーのこの小説にはパリとプロヴァンスを分ける境界線が走っていて、ドデーは確かにその境界線の外側からの視線、首都パリからの視線を持ち込んで南仏を描いた作家と言える。

この小説の額縁はさほど大きくはない。それでもアラン・ヴィアラはここに19世紀後半のパリの文学動向とドデーとの関係を読み込んで非常に興味深い。服装描写などの細部にもこだわって、グランゴワールが15世紀の実在の詩人と19世紀の作家たちの想像の詩人との「文学的織物」であることを明らかにしている（Viala 126-127）。しかし外枠物語の登場人物はパリの詩人とプロヴァンス

の農民 (ménagers) だけで、後述する佐藤の小説の場合と比べるとやはり非常に簡素である。詩人はパリのいい新聞社の記者のポストを蹴って、相変わらず貧しく詩作を続けようとしている。これを窺めるべく、プロヴァンスの「私」はその農民の間に伝わる物語を語る。

何處までも勝手氣儘に押し通さうといふのか…、まあいゝ、少し「スガンさんの山羊」の話でも聞き給へ。我儘一ぱいに暮らして行かうとすると、どんな目に遭ふかが解るから。(ドーデー 40)

これは昭和初年から現在まで続く岩波文庫版のほぼ変わりが無い訳文である。「勝手氣儘に押し通さう」とか「我儘一ぱいに暮らして」という表現には、人生上の忠告、あるいは道徳上の窺めという色合いがよく出ている。これは訳者桜田の読解である。ドーデーのフランス語文<sup>7)</sup>はやや別様に日本語に移すことも可能である。

君はあくまで自分の好きなように自由でいたいと言うんだね…それじゃあ、ちょっと「スガン氏の雌山羊」の話を聞いてほしい。自由に生きたいということかどうか、わかるだろうから。(260)

これでも窺めている調子が出ていよう。それでいてまた、「自由に生きたい」という言葉にはグランゴワールの「自由」への意志も浮かび上がっていよう。このニュアンスは内挿物語によっていっそう鮮明になる。「私」は語り終えた後、「はア曉方にや、狼め、山羊っ娘を食つちまつただア<sup>8)</sup>」(ドーデー 49)と手紙を終えているが、この最後の言葉を裏切るように、ブランケットを簡単には殺さなかった。

あゝ、健氣な仔山羊！何と甲斐甲斐しく立ち向つたことだらう！十遍以上も一嘘ではない、グランゴアール君、— 彼女は狼に、息をつくための退却をさせた。(ドーデー 48)

ブランケットは死が百パーセント確実な状況で、もうだめだと一時は思うものの、思い直し、そうしてルノードばあさんのように、最後の星が消えるまで戦

い続け、文字通り死力を尽くして死んでいった。ラ・フォンテーヌの『寓話』「オオカミとイヌ」では、狼は首輪で拘束された太った犬の生活を見て、「どんなごちそうも、おれはちっとも欲しくはないし、そんな犠牲を払うなら、宝物だっていらないよ」と逃げ出している（巻の一、5）。「自由に生きる」ことを求めるブランケットの戦いはこの狼に重なってくるのである。

ドデーの内挿物語では「私」は雌山羊の無謀な逃走に筆誅を加えるどころか、反対に、上の引用によく表れているように、その絶望的な奮闘に賛辞を送り、その戦いを最後までしっかり見届けようとしているのである。こういう「私」が外枠物語でも語り手なのである。パリの詩人への手紙は、窘め諫める旋律を主調としながらも、詩人の健闘を讃え、その生き方に深い敬意を払っていることを読み取ることができるのである。

### 取り替えられた額縁

佐藤春夫は「瀬沼氏の山羊」第三章にドデーの翻訳を大きく嵌入した時、「スガン氏は決して山羊には幸運ではなかった」とはじめており、原作にもともと付けられていた、プロヴァンスからパリへの手紙という額縁をすべて取り外してしまっている<sup>9)</sup>。

佐藤の小説が展開するのは、こうしてパリでもプロヴァンスでもない。東京の本郷近辺に住んでいる瀬沼氏という38歳の男性が主人公である。彼はアメリカ留学経験があり、「相当の学識のある」人である。この人物のプロフィールで最も強調されているのは、「自分より十も十五も年の若い人たちが好きで、さういふ青年を友達にした。[中略]瀬沼氏はその青年たちと一緒に青春をも楽しんだのである」(24)という一面である。青年、中年、老年を年齢で切り分けるのはもちろん難しいし、時代や社会によっても変化する。それでもこの小説内ではっきりしているのは瀬沼氏が「青年」を過ぎていることである。

瀬沼氏はフランス語を学びに夜間クラスに通い始める。ある夕方、「神保町まで来ると、混雑のなかを活潑に乗り込んで来たひとりの洋装の少女があった」(30)。たまたま電車と一緒にになったこの「十八ぐらゐ」(30)の少女に対する瀬沼氏の「今度の恋」(45)が外枠小説の中心になる。

戦後、佐藤は短編小説について次のように書いている。

短篇小説になるとその長さの制約上、決して世間話は書けない。誤ってそれを書

けばほんの筋書きに終るだろう。同じく世相を描き風俗を写しても短篇では世間話は作品の背後にかくされて、その表面に出ているものは他のすべての種類の短篇小説と同じく常に一種の詩情の表現が目的となっている。短篇小説とは所詮人間の内面的、外面的両方面の日常生活のなかに片鱗を示した詩情を把握した散文芸術だ、と定義しても間違いではあるまい。（「短篇小説は何故不振か」177）

「瀬沼氏の山羊」は「世間話」なのかそれとも「散文芸術」なのか。後者だとして、「日常生活のなかに片鱗を示した詩情」を探すならば、例えば、ヴィクトル・ユゴーもシャルル・ボードレールも描き出した、〈通り過ぎる女〉（*une passante*）の魅力であろうか。瀬沼氏は込み合った電車の車掌台に立ちながら、「妙なもので、女などといふものは電車のなかなどでちらりと見かけるのが一番美しい」などと思っている（31）。「芸術的因習」が心に根を張っていて、そこから「自分の事業として芸術を扱ふやうになった」（『田園の憂鬱』215）とも書いている佐藤であるから、男性作家の間に受け継がれてきたモチーフにも抵抗はなかったのかもしれない。エスメラルダのあとをつけるピエール・グランゴワールは「奇跡の宮廷」に迷い込んで、危うく処刑されそうになる。〈通り過ぎる女〉を追いかける男として、瀬沼氏もまた危機に陥るのは必定なのか。しかし少女の行く先は瀬沼氏と同じフランス語学校である。

上のクラスにいるこの少女に追いつくために、瀬沼氏は頑張って勉強し、ようやく後ろの席に座れるまでになる。ある日、やや年長のU子と彼女との会話を聞いて、この少女F子が「スガン氏の山羊」が好きで、その授業を心待ちにしていることをつかむ。瀬沼氏はこの物語を知らない。「その好きだといふものを見ればその人の心はすつかりわかる筈だ」（34）。こうしてドデーの物語が瀬沼氏の「今度の恋」のストーリーに挿入される。

瀬沼氏は読み始める。「二晩かかって [中略] 字引と首引で、どうやらかうやら読んだ」という文脈からは、たどたどしい訳が展開されても理解できるところであるが、途中、そうした訳読の雰囲気喚起されるのは何か所かあるものの<sup>10)</sup>、全体として翻訳臭など全く感じさせない文章として提示されている<sup>11)</sup>。

佐藤による額縁外しは徹底していて、原作のプロローグとエピローグばかりではなく、単純過去で記述される内挿物語の展開中にグランゴワールに呼びかけるシーンもすべて削除されている。

エスメラルダの子山羊とほとんど同じくらい素敵だった、覚えてるだろう、グランゴワール… (261)

ここは外枠物語のピエール・グランゴワールがユゴー『ノートル・ダム・ド・パリ』の詩人と同名であることをドデー自ら明かしている一節である<sup>11)</sup>。エスメラルダはいわゆる〈運命の女〉<sup>ファム・ファタル</sup>のように聖職者フロロの人生も鐘撞ガジモドの人生も転覆させてしまうが、グランゴワールは最後エスメラルダの魅力からも自由で、彼女の雌山羊ジャリを救ってパリの街に消えて行く。詩人と雌山羊の結びつきはこのように強く、深い。「瀬沼氏の山羊」にはこうしたテキスト連関、それにまつわる連想は完全に削られている<sup>12)</sup>。ドデーの小説の額縁は一切外されて、ただ狼と雌山羊の物語だけが残る<sup>13)</sup>、それが東京の中年男性の偶々見かけた少女への恋という、新たな額縁の中にはめ込まれたのである。

### 外枠物語と内挿物語の対応関係

ドデーの小説には上述したようにパリとプロヴァンスの対比が際立たせられ、また外枠物語と内挿物語の間には微妙な不整合が施されていたとは言え、雌山羊が詩人の暗喩であることは明らかで、両物語を通じて語り手の視野の中心にいるのは、その〈雌山羊＝詩人〉であった。スガン氏は外枠でも内挿でも脇役にすぎない。それに対し佐藤の小説では、語り手が長い外枠物語でずっと注目しているのは、小説標題の「瀬沼氏」である。若い雌山羊を手元に囲い込んで置こうとするスガン氏に、「令嬢山羊子」<sup>マドモアゼル・シェーブル</sup>(39)に恋々とする瀬沼氏が重なる。しかし、雌山羊の心情に寄り添ったドデーとは異なり、佐藤の小説では語り手はほとんどF子の思いには入り込まず、瀬沼氏の意識をひたすら追いかけている。

瀬沼氏は二晩かけてスガン氏の山羊の物語を翻訳しながら読んでみた。しかしF子がこの物語を好きな理由がよくわからない。

あの可愛らしい娘は、この文章のうちで、一たい何が気に入ったのだろうか？ ちよつとイプセンの「ノラ」でも思はせるやうなこの話の前半の寓意であらうか。それとも後半での、山羊のけなげな勇ましい態度だろうか。それとも亦その内容などではなくアルフォンス・ドオデエのこの単純ではあるが魅力に富んだ文章そのもののことであつたらうか、??? — 瀬沼氏はたうとう解らずじまひだつた。

(39)

瀬沼氏のこの疑問、すなわち外枠物語と内挿物語の結合がしっくりこないことが外枠物語の進行方向を転じさせる。瀬沼氏はやや親しくなっていた U 子にその疑問をもらしてしまふ。U 子はその理由を知っている。F 子が付き合っている「慶応の生徒は級中でも不良学生」であるが「そんな危険人物と附合つても F 子自身は決して大丈夫だといふことを U 子に弁明するつもりで」ドデーの小説を引き合いに出したのである (39)。ここで、F 子が雌山羊で慶応の学生が狼、という対応関係に導かれる。

しかし「年もいくらか長けてそれにもともと不良性のある U 子」は「ちよつと瀬沼氏をからかつて見てやりたい気持」になる (40)。瀬沼氏はこの女性の手管にかかり、自分こそが危険な狼で、F 子はそれでこの物語を引き合いに出したのではないか、という疑念を U 子に言ってしまう。

F 子は瀬沼氏など眼中に置いていないことを U 子はよく知つてゐる。それにつけても、今の瀬沼氏の自惚れた一言 — 存在を認められてゐない人間は、嫌はれてゐると思ふのでさへ自惚れに相違ないではないか。— その一言が、U 子にはたいへんおかしかつた。(40)

瀬沼氏の、狼は自分という等式は U 子に否定されるばかりではなく、そこに「自惚れ」を看取されてしまったのである。

そうしてある日、瀬沼氏は U 子から、F 子と一緒に三人で活動写真を見に行こうと誘われる。それは「若い小鳥」という西部劇で、都会に住む少女が田舎に憧れて、「森林生活をする哲人で、五十ぐらゐな男」である身内を頼って行く (44)。瀬沼氏は映画の内容が退屈で、自分のアメリカ滞在に思いを馳せている。当時瀬沼氏も若く、ジョージと呼ばれていた。少女たちとのちょっとした恋心のやりとりもあった。映画は結末に向かい、土地の若者たちの争いの対象になった少女を老哲人も好きになっているが、しかし少女は若者のほうに身を委ねて行く。スクリーンには一つの英文が浮かび上がる。その英語を読み上げる F 子。弁士は語る。「若き小鳥は緑の枝を慕うて飛び去り……」ここで場内に煌々とあかりが灯る。



その瞬間にU子とF子とはふたりで申し合わせたやうに顔を向け合つてにやりと笑つた。それから彼女たちは今度は瀬沼氏をふり返つて、やはり同じやうににやりと笑つた。— 何でもない笑であつたかも知れない。見物し終つた人が感ずる安心したやうな気持を表す笑であつたかも知れない。それなのに彼女達が笑つた時に、瀬沼氏は彼の心が冷たくなつたのを感じた。(46)

これが〈通り過ぎる女〉を迫いかけて瀬沼氏の受けた罰である、報いである。

阿部昭は、チャーホフの小説が好きになって、それを盗作とさえ思われてしまうようなことまでもやってしまった若いキャサリン・マンスフィールドを論じながら、「模倣すべきは個々の作品、個々の文章ではない、巨匠と言われる人々の仕事が自分に与えた感動をこそ「まねぶ」べきである」、と書いている(128)。佐藤は翻訳を大量投入して、ほとんど盗作まがいのことをやっている。しかし駆け出しの小説家ではない。ドデーの小説に「感動」を受けたのであり、少なくとも〈額縁小説〉を新たに構想してみたいと思うほど佐藤は創作意欲をかき立てられたのであろう。

佐藤の小説における内挿物語と外挿物語の間には、すでに見たように、まず雌山羊はF子で、狼は慶応の学生という対応関係が認められた。次に、瀬沼氏の疑問の中で、狼は瀬沼氏自身になった。狼の項はこのやうに変化するが、雌山羊の項にはずっとF子がいる。しかしF子は学生の危険をしっかりと把握し、賢明な少女として書かれている<sup>14)</sup>。ブランケットの行動に「勝手氣儘」を見ようが「自由に生きる」意欲を見ようが、F子はそういう女性ではない。だから殺されもしないし不幸にもならない。この小説で傷ついたのは一人しかいない。ほかならぬ瀬沼氏である。

この視角から佐藤の小説の全体を改めて読み直すと、スガン氏の囲いを抜け出て食べられてしまったブランケットのやうに、自分がいるべき場所の外に出てしまったのは瀬沼氏一人である。F子は自分の柵内に生きている。瀬沼氏が付き合っていた若い友人たちも、昔からの友人たちも皆そうである。

むかしの友といふ友は誰も彼も、もう皆、老いて来た。いゝ具合に老いて来た。そのなかに彼自身だけがひとり老いることから取残されたやうなものである。不幸。— 何といふ風変わりな不幸であらう。(46-47)

佐藤の小説の中に巖として張り巡らされている柵は、ドデーのような自由と従属を分ける境界ではない。老と若を分断する世間の境界線である。瀬沼氏はこれを越えたのであり、F子はU子といっしょに、こうした「瀬沼氏をふり返って、やはり同じやうににやりと笑った」のである。この視線は山の高みから麓の「檻」<sup>15)</sup>を見下ろすブランケットのものではなく、「山羊が後をふり返ると、狼は意地悪さうににやりとした」(38)と描かれた狼の視線であろう。F子はU子の共犯者であり、この二人の女性こそ狼である。少なくとも、越境した〈雌山羊＝瀬沼氏〉にはそのように映じている。瀬沼氏は小説の進行とともに姿を変える。スガン氏でもあり、狼でもあり、雌山羊にもなる。雌山羊に見えていた少女も最後、狼になる。外枠物語と内挿物語の対応関係をここまで転換すれば、佐藤はプロヴァンスの物語の翻訳を大量に作中に入れ込んでも、これは盗作ではない、文学的技巧を楽しんでいるのだ、という自信があったのではないであろうか。

### 「少女宗」の変奏

〈額縁小説〉という用語は物的なメタファーを用いて、外枠と内挿との空間的分離が喚起される。もちろん額縁の多様な要素は絵画の鑑賞に干渉していよう(栗川 416)。それでも、文字列に従って単線的に読んで行かざるを得ない小説は、展示絵の空間的二元的構図よりも音楽で言う対位法のような、二つの旋律の同時進行をモデルにするほうが、その特徴をよく説明できるように思う。

ドデーはすでに見たように、二つの物語の同時進行性をいっそう確実にするために、プロヴァンス物語の展開中の何か所かでグランゴワールを登場させた。またこの同じ物語を戯曲『アルルの女』の中に投入した際には、それとは反対に、三幕それぞれに狼と雌山羊の物語を短く内挿しつつ(*L'Arlésienne* 8-11 ; 49 ; 102)、全体の進行に並行させている。恋愛・失恋・嫉妬・苦悶といった一連の恋愛関連事象を、最後に自殺してしまう若者ばかりではなく、周囲の人物たちもそれぞれかつて経験し、また現在経験しつつある、という『アルルの女』の第一旋律の展開を、スガン氏の雌山羊の物語は第二の旋律として、ある時は強くある時は弱く、しかし最後までずっと支えているのである。

『アルルの女』におけるこのいわば対位法的手法は佐藤のドデー利用に影響を及ぼしているのではないかと推定することも可能である。佐藤の場合も、ド

デーの小説は一回の投入で役割を終えるというよりも、これまで検討したように瀬沼氏の心の揺れに対応しながら最後まで並行して行くのである。そこには確かに、「着想に一工夫」や「表現にもまた一考」を認めることができるように思う。

それでは、短編小説を書くもう一つの醍醐味、「人生の見方に一クセ（個性）」という点はどうか。これまで言及しなかったが、「退屈してみた」瀬沼氏がなぜフランス語を学びはじめたのかについては、次のように書かれている。

今までまだ学んだことのなかつた外国語を一つ習つてやりませう [中略]。「一つの国語を知るといふことは一つの<sup>たましひ</sup> 霊を知るといふことだ」といふ諺を瀬沼氏は思ひ出した。一つの霊を知るとはやがて一つの恋をするに同じだ。かふいふ風にして、我々の主人公瀬沼氏は、仏蘭西語を恋人に選んだのであつた。(30)

この諺の出自は明かされていないが、例えば、日本の言霊信仰、あるいはカール大帝の「もう一つ別の言語を話すことは、もう一つ別の魂を持つことだ」などという名言なども考えられる<sup>16)</sup>。いずれにしても、言語との恋愛関係ということには、「人生の見方に一クセ（個性）」を認められるかもしれない。

しかしそれでも、その恋愛対象はフランス語であり、しかも学ぶ前にすでに「恋人に選ん」でいる。「麴町の英国大使館の裏」(30)のフランス語夜学校にいろいろな男女が通っているという状況設定、また、これまで検討してきた、ドデーの小説の盗作まがいの手法、これらを勘案すると、1920年代、東京には依然としてフランスの威光が強く及んでいて、瀬沼氏の先験的な恋人選択もこの言及されない全体状況なしには説明がつかないように思う。

ところで、この言語との恋愛関係というオリジナルな方向も、最後、「語学は恋人にならないといふ真理」(47)の提示であっさりと締めくくられ、結局、フランス語は当て馬で、恋の本命は少女であった、ということになる<sup>17)</sup>。青年を過ぎた男の少女への恋というモチーフは、他ならぬ『ノートル＝ダム・ド・パリ』でも重要である。エスメラルダは16歳、彼女への恋ゆえに最後殺される司教補佐フロロは35歳ほどの人物である。一方日本の文壇ではこのモチーフは田山花袋の十八番であった。36歳の竹中古城と19歳の横山芳子の関係を描く『蒲団』ばかりではない。「少女病」も37歳の杉田古城が少女たちに魅惑される短篇小説である。

電車で女を見るのは正面では餘り眩くつて好けない。さうかと言つて、餘り離れても際立つて人に怪しまれる恐れがある、七分くらいに斜に對して座を占めるのが一番便利だ [中略]。込み合つた電車の中の美しい娘、これほど彼に興味深くうれしく感ぜられるものはない。(271-274)

前述した、電車で見かけた女性の魅力についての瀬沼氏の語りは、この田山の変奏である。田山にとってこの素材は手垢のついていないものであったはずである。「電車以前の東京」について、「馬車鐵道も大通に一篠あるばかりで。交通は十の八、九は、車に由らなければならなかつた」(『東京の三十年』597)。杉田が出版社への通勤に使っている甲武線の電氣鐵道化は1904年のことである(国土交通省)。その前年に東京に市内電車も登場している。田山はこの新たな交通機関を使い、そこに出入りするアノニムな男女の人間関係を、男から女への一方的な視線の下で描いたのである。小説の最後で杉田は甲武線電車のひと揺れで線路に落ち、反対側から来た上りに轢かれて死んでしまう。これは現代の鐵道ではやや考えにくい、オープン・デッキをもっていた草創期の車両では十分ありうる事態であつたらう。「少女病」患者は、時代の最先端の技術が開いた新しい人間関係の中で病いが重篤化し、そして死に至つた。

また、田山の「少女譜」は、若かつた頃に少女に魅惑された思い出を中年男性が語る小説である。しかしその教訓は同じである。

爾、いかに烈しき戀に亂れ、いかに情の海の鷗たらんことを欲したりとてそは絶えたる路を行き、劍なせる絶壁を攀づるよりも難からん。新しき色鳥は既に爾の褪せたる翼を喜ばず。(168)

「新しき色鳥」と「爾の褪せたる翼」の絶望的な乖離。F子の横顔と「緑の枝」という言葉が頭から離れない瀬沼氏は、紙に「落葉の枝」と何度も書き続けている(47)。田山の少女趣味は当時の文壇仲間では有名なことで、生田葵山は、「相變らず少女宗ですね。どうも田山君の憧憬と來たらかなはん」と冷やかしている(『東京の三十年』590)。佐藤の瀬沼氏も確実に「少女宗」の信者である。

もちろん、少女への恋愛感情を伴う中年男性の視線は当時の社会では主流で

はなかったであろう。東京の夜間クラスでフランス語を学ぶ少女とはおよそ異なる境遇にある「女工」が総合雑誌で注目されはじめ<sup>18)</sup>、また美少女ということさえ輦蹙を買う時代である<sup>19)</sup>。だからこそ瀬沼氏の越境もあり、その「風変わり」は罰も受けたのである。しかし世間的には「風変わり」でも、「少女宗」は文学世界では境界の内側である。「令嬢山羊子」は文壇の男性作家たちの視野の中に再び現れた、おなじみの、しかし今回はフランス語の装いをした、やや変種の少女形象であったと言えるのだと思う。

## 注

- 1) 初出（『主婦の友』第8巻第6号、1924年）にはないが、同年刊行の『たびびと』（短篇シリーズ3、新潮社）収録版では、「スガン氏の山羊」全体に囲みケイがつけられており（鳥居 435）、嵌入性はいっそう目立たせられている。
- 2) 本論で取り上げる桜田佐による翻訳が、1927（昭和2）年に創刊された岩波文庫の一冊として刊行されるのは1932年である。篠沢秀夫『立体フランス文学』の「翻訳文献」一覧には、「風車小屋だより 石川剛 大蔵書店 大2」とあるが（438）、これは不正確である。当時一高の教員であった石川剛が、日本では「淫靡な文学の外には佛蘭西文学はない様に思」われていることを問題視して、「真面目な佛蘭西文学を世間に紹介する」べく（石川 V-VI）短編集『ルクサンブール』を編み、ドデーの『私の風車からの手紙』からは「風車小屋より」、「星」、「宿屋」の三篇を選んで翻訳している。ドデーの原著に「風車小屋より」というタイトルはない。石川が翻訳したのは、風車小屋に住み込む際の情景を描いた«Installation»であり、そのタイトルは石川がつけたものである。
- 3) 1892（明治25）年に生まれた佐藤春夫は、日本におけるドデー全盛期を生きてきた。「雑誌を小説の発表機関とするわが国では短篇小説が便利なジャンルでもあり、読者の気風にも合ったのか、モウパッサン、チエホフ、ドオデエ、さてはポオなどと類は変わっても同じく短篇の作家が喜ばれるのが明治中期以来の現象であった」（「短篇小説は何故不振か」177）と書いている。「田園の憂鬱」（1919年）には、エピグラフとしてエドガー・アラン・ポーの一文が英語と日本語訳で掲げられている。
- 4) ちょうど1920年代に再びプロヴァンス文学が日本の文学者の間で注目されている（石塚）。こうした事情も働いているのかもしれない。
- 5) 前掲『主婦の友』初出版の標題には「中篇小说」という冠が置かれている。しか

し前掲の単行本は「短篇シリーズ」の一冊である（鳥居 435）。

- 6) 例えば、プロヴァンス・アルプ・コート・ダジュール地方の小学校でも、CE2（小学校三年）クラスで、これをもとにマンガ（BD）を作る授業も行われている（*École élémentaire Figone*）。
- 7) ドデーの原文は次の通り。「*Tu prétends rester libre à ta guise jusqu'au bout...Eh bien, écoute un peu l'histoire de La Chèvre de M. Seguin. Tu verras ce que l'on gagne à vouloir vivre libre.*» (260)
- 8) この箇所、原文はプロヴァンス語で書かれ、フランス語訳が付されている。
- 9) 佐藤が小説中に投入した日本語訳のもとになっているフランス語原文を特定できていないので、原文自体がもともとこういう形であった可能性も否定できない。実際、インターネットで検索して私が見たいいくつかの現行の子供用フランス語版は佐藤のようにドデー原作の額縁を外して、童話として提示している。
- 10) 前述のとおり、翻訳に使われた原文を特定していないので、ここではプレイアド版テキストと対比しての検討になるが、具体的には、植物の名前に関わる二か所（①「齒朶（？）」、②「紫のデイジダアル（字引を引くと、どんな花だか知らないが、「死人の指」とある。気味の悪い）」、ともに37頁）、および、「この美食家（—美しい山羊を覗いてる狼のことをかう呼ぶのだらう……）」（38）、などである。この最後の箇所の原語は「*la gourmande*」である。女性形に置かれていることから明らかかなように、ここは狼ではなく雌山羊のことを指している。佐藤のこの訳文は教室ならば誤訳と指摘されてしまう。佐藤はわざとやっているのだろうか。
- 11) 桜田は「エスメラルダ」に注を付して、「ユーゴーの小説「ノートルダム・ド・パリ」に現れる美人。常に金の角を持った山羊を伴ふ」（243）と書いている。
- 12) 「ピエール・グランゴワール」というこの詩人名については、ユゴーの小説ばかりではなく、ドデーのこの小説と同年に公開されたテオドル・ド・バンヴィルの演劇『グランゴワール』に（*Ripoll 1290*）、さらにまた、またこうした登場人物たちを越えて、実在した詩人ピエール・グランゴール（*Pierre Gringore*）にインスピレーションを受けている、と指摘されている（*Viala 131*）。ヴィアラは、こうしたテキスト連関、19世紀半ばのフランスにおける文学上の大きな変動、またそこにおけるドデーの態度決定を勘案して、ドデーの「グランゴワール」とは当時明確な形を取りつつあった、ドデー自身もそこに組しようとした高踏派を象徴する詩人と捉え、さらに、この小説全体を、高踏派から離脱するドデーの「内的戦い」とであると解釈して、非常に興味深い（132-134）。

- 13) グランゴワールに関係しない内容でも大きく削除されている箇所が一か所だけある。逃げ出したブランケットが、山で生きるカモシカ (chamois) の群と遭遇し、皆にちやほやされ、その中の若いカモシカといい仲になることが書かれている部分 (263-264) である。男女関係、あるいは「ブランケットのセクシュアリティ」 (Viala 130) を喚起する箇所をこうして削除することで、佐藤は外枠物語と内挿物語の異質性を際立たせようとしたのであろうか。子供用にリライトされたフランス語版 (Hellokids) でもこの箇所はやはり削除されている。
- 14) 第4章から第5章にかけて、借家を探しているF子とその叔母に瀬沼氏が知り合いの家を勧めるエピソードが展開されるが、その中でもF子の賢明さは強調されている (44)。
- 15) ドデーのフランス語は« le clos »であり、桜田はこれを1932年版では「圃地」(45)、現行の1958年改訳版では「畑」と訳している。
- 16) この言葉は、ややヴァリエーションがあるものの、シャルルマーニュの名句として名言集サイトにしばしば掲載されている。例えばフランスの日刊紙『パリジャン』のサイトを参照のこと (Citation)
- 17) 新潮の刊行本に収録された版の結末は、「瀬沼氏の今度の恋はたったこれだけで全部であった。さうして三年の歳月を要してゐる。その三年の間に彼は老いた。さうして学び得たところのことは語学は恋人にならないといふ真理だった」(47) となっている。下線部は雑誌初出版にはない (鳥居 432)。
- 18) 細井和喜蔵の「女工哀史」が総合雑誌『改造』に掲載されるのは、「瀬沼氏の山羊」が女性雑誌『主婦の友』に掲載れるのと同年の1924年である。
- 19) 田山の「少女病」や『蒲団』などが発表された1907 (明治40) 年、『時事新報』などの新聞社によって日本で最初の美人コンテストが行われていたものの、当時の社会では「美人排斥」の風潮が強かったという (呂 268)。

## 引用文献

- 阿部昭 『短編小説礼賛』、岩波新書、1986年。
- 石川剛 『ルクサンブール』、大倉書店、1913年、国立国会図書館デジタルコレクション。
- 石塚出穂 「あやめ咲く野の農民詩人 1920年代の日本と詩人ミストラル」『仏語仏文学研究』、第27号、2003年。

- 国土交通省 「鉄道主要年表」、<http://www.mlit.go.jp/common/000227427>
- ドーデー 『風車小屋だより』、櫻田佐訳、岩波文庫、1932年、国立国会図書館デジタルコレクション。
- 佐藤春夫 「瀬沼氏の山羊」『定本佐藤春夫全集』、第5巻、臨川書店、1998年。
- 「短篇小説は何故不振か 文学俗論のうち」『定本佐藤春夫全集』、第24巻、同上。
- 『田園の憂鬱或いは病める薔薇』、『定本佐藤春夫全集』、第3巻、同上。
- 篠沢秀夫 『立体フランス文学』、朝日出版社、1975年。
- 栗川直子 「絵画と額縁の組み合わせ効果における理解度の影響」『日本感性工学会論文誌』、Vol.13 No.2、2014年。
- 田山花袋 「少女病」『花袋小品』、易風社、1908年、国立国会図書館デジタルコレクション。
- 「少女譜」『花袋小品』、隆文館、1909年、同上。
- 「東京の三十年」『花袋全集』、第11巻、花袋全集刊行會、1923年、同上。
- 鳥居邦朗 「解題」『定本佐藤春夫全集』第5巻、前掲。
- 「マタイによる福音書」 『聖書』、新共同訳、日本聖書協会、1999年。
- 矢橋透 『〈南仏〉の創出 癒しの文化史』、彩流社、2011年。
- ラ・フォンテーヌ 『寓話』上・下、今野一雄訳、岩波文庫、1984年。
- 呂輝菫 「郁達夫の描いた日本人女性—その『沈淪』と田山花袋『少女病』との比較研究—」『名古屋大学人文学フォーラム』、第2号、2019年。
- Citation Célèbre. <https://citation-celebre.leparisien.fr/citations/147366>
- Daudet, Alfonse. «La Diligence de Beaucaire», *Lettres de mon moulin, Œuvres, I*, Bibliothèque de la pléiade, Gallimard, 1986.
- «La Chèvre de M. Seguin», *id.*
- *L'Arlésienne*, 1872, Gallica, Bibliothèque nationale de France, <https://gallica.bnf.fr/>
- École élémentaire Figone. <http://www.ec-figone.ac-aix-marseille.fr/>
- Gérard, Alain. *Le Midi de Daudet*, Édisud, 1988.
- Hellokids «La Chèvre de M. Seguin», <http://fr.hellokids.com/>
- Ripoll, Roger. «Notes et variantes», *Lettres de mon moulin, ibid.*
- Viala, Alain. «Ah, quelle était jolie...», *Polyix*, vol. 5, n°17, Premier trimestre, 1992.

\*ウェブサイトについてはすべて、2020年2月11日に確認を行った。